

「風にゆらぐ灯火」

“Candles in the Wind”

マタイによる福音書 5章 14～16節

聖学院大学 人文学部チャプレン エバート・D・オズバーン

今日の昇天者記念礼拝は、聖学院大学の家族において、天に召された方々を思い、毎年行われる記念礼拝です。聖学院大学が1988年に創立されて以来、今日までに64名の方々が主の御もとへ召されました。20名の学生、9名の大学院生、33名の教職員、そして、私たちと深く関わってくださった2名の学校法人管理役員の方々です。

この64名の兄弟姉妹は、多くの人々に愛されました。

これらの方々を知り、愛する人々にとって、彼らは“風にゆらぐ灯火”のようであったと確信します。

灯火の唯一の目的は闇に光を放つことで、燃えつづけている限りその使命を果たします。私たちが今日偲ぶ尊い方々は、マタイによる福音書5章14節でイエス・キリストが“あなたがたは、世の光である。”と、山上の垂訓の中で言われた、この戒めを守られたお手本であると、私は思います。

そして、その一つの光は、ウィリアム・G・クレーラー先生でした。クレーラー先生は2006年に退職され、アメリカに帰国後カリフォルニア州クレアモント市、ロサンジェルス郊外にあるピルグリム・プレイス・クリスチャン・リタイアメント・コミュニティに住んでおられました。私は、1989年聖学院に雇用されてから、クレーラー先生が退職されるまで17年間先生のもとで働く事が出来たことを、神様の大きな恵みであると感謝しています。

クレーラー先生は、2015年9月26日に天に召されました。享年84歳でした。先生は日本で宣教師として45年以上仕えられ、そのほとんどの年月を聖学院の教職員として働かれました。そして、1969年から1994年の25年間は、女子聖学院短期大学の学院長として努められました。

クレーラー先生は、他にも多くの職務を果たされた立派な方でしたが、世の光となったのは、先生ご自身の存在でした。先生は聖学院のモットーの「神を仰ぎ、人に仕う」を生涯まっとうされたお手本です。先生をご存知の方は、特別ハードワークな先生であったと言われると同時に、またいつも元気な精神をもち続け働かれていたと思返されることでしょう。同時に、クレーラー先生は忍耐の化身のようでもありました。また、先生は信仰深く知性にあふれた方でした。先生は、真の謙虚さの内から生まれる誠実さの模範であり、寛容で、思いやりのある方でした。また、ご自分の力のある限り誰をも助ける方でした。実際、クレーラー先生は、ガラテヤの信徒への手紙5章22、23節に書かれてある、愛・喜び・平和・寛容・親切・善意・誠実・柔和・節制という霊の結ぶ実をもつお手本だと思います。

ウィリアム・G・クレーラー先生はマタイによる福音書5章14節で、イエスが言われた“世の光”でした。そして、良き影響を、ここに集う私たちの中の多くの人々にも与えられました。

勿論、今日の記念礼拝は、聖学院家族の内の昇天されたすべての方々を偲ぶ会です。個人的

にクレラー先生を知る私は、先生についてお話しする事ができましたが、事實は、亡くなられた時が何才であったとしても、他の63名の故人お一人お一人が、その方々をよく知る人々にとって“世の光”であったのだと、私は信じます。

紀元前106年から43年に生きた、ローマの哲学者、また政治家であった マルクス・トゥッリウス・キケロは、つぎのように書いています。“亡き人の人生は生きる者の回想・記憶のなかに生きている。”

確かにこれは真実です。そして、個人的に知ることのできた私たちが故人を憶え、彼らの残してくださった魂の遺産を引き続き生きることが、私たちの義務であるのです。

また、私たちが故人の魂の遺産に敬意を払う一つ的手段として、私たちも亡き人々と同じように、いつの日か消える“風にゆらぐ灯火”であることに気づくことではないかとおもいます。私たちは、皆、地上から去る者で、誰もその日を知る者はいません。

私たちは、いつの日か突然吹き消される運命をもつ“風にゆらぐ灯火”である存在という認識をもって、詩篇90篇12節のモーセの祈りの言葉を私たちは心に留めるべきだと思います。“生涯の日を正しく数えるように教えてください。知恵ある心を得ることができますように。”

言い換えれば：この世の私たちの人生は、必ず、そしてある時は突然に過ぎ去るものであることを知っている私たちは、聖書の永遠なる神に信仰を定め、義なる人生を求め生き、与えられた時を大切に有意義に用いなければならないのです。

主のもとへ行かれた聖学院の家族の一人一人を憶える最も良い方法は、世の光となることです。私たちは神の光を照らし返す者となることです。そして、愛、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制である神の光を他の人の人生に放つことです。これが“神の人々に仕える”という意味です。

これを実行することによって、今日私たちが偲ぶ人々の魂の遺産を、私たちは受け継ぐこととなり、この世にあって亡き人々の命をさらに意味づけるとともに、私たちの人生に意義を与えることとなります。

私たちは皆、“風にゆらぐ灯火”であることに気づきつつ、先に召された私たちの聖学院家族の64名の方々をおぼえ、私たちの人生の先輩として敬意を表しましょう。私たちの永遠なる主に信仰を据え、この世のつかの間の人生において“世の光”として、意義のある生き方をしてゆきましょう。

祈祷：

天の父なる神様、今日の記念礼拝の内に覚える天に召された聖学院家族64名の一人一人は、あなたにとって大切な宝です。これらの方々の残された美しい人生をあなたに感謝いたします。そして後輩として、私たちが彼らの後を立派に歩むことができますように、どうかお助け下さい。私達が、『世の光』となる事が出来ますようにお助け下さい。私たちは皆『風に揺らぐ灯火』であることを忘れず、また、私たちの日々があなたから贈られているものであることを絶えず覚え、目を覚ましていることができますようにお導き下さい。どうか私たちのこの世の束の間の時を、最上の試みをもってあなたを仰ぎ、人に仕えることができますようにお願いいたします。

この祈りを永遠の主、救い主、イエス・キリストの尊き御名を通してみまえにお捧げいたします。

アーメン

2015年11月11日 聖学院大学 召天者礼拝